

## 大分県道州制研究会 大学生との意見交換会 議事録

開催日時：平成22年8月27日（金）13：30～15：30

開催場所：大分県立芸術文化短期大学 管理棟2階会議室

出席者：（委員）高橋靖周、石川公一、梅林秀伍、辻野功、中山欽吾、西太一郎、林浩昭、村上和子（敬称略）

（学生）A 大分大学 大学院教育学研究科教科教育専攻 1年

B 大分大学 経済学部 3年

C 県立看護科学大学 看護学部 4年

D 県立看護科学大学 看護学部 4年

E 県立芸術文化短期大学 情報コミュニケーション学科 2年

F 県立芸術文化短期大学 情報コミュニケーション学科 2年

G 日本文理大学 経営経済学部 3年

H 日本文理大学 経営経済学部 3年

I 別府大学 文学部人間関係学科 4年

J 別府大学短期大学部 保育科 2年

K 立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋マネジメント学部 4年

（事務局）佐藤総務部長、中垣内行政企画課長

（事務局）

定刻になりましたのでただ今から大分県道州制研究会大学生との意見交換会を開催します。

それでは、まず最初に大分県道州制研究会の高橋座長からごあいさつをお願いします。

（高橋座長）

皆さんこんにちは。座長の高橋でございます。

学生の皆さんには初めてお会いいたしますので、私の自己紹介をさせていただきます。私は現在、大分銀行に勤務しております。以前は頭取、会長をしておりましたけれども、この4月から取締役相談役をさせていただいております。財界活動としましては九州経済連合会というものがありますけれども、その大分県の代表で、副会長を務めさせていただいております。また本日お見えの皆さんの大学の先輩方が、私どもの銀行で元気に活躍されています。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、「大分県道州制研究会」は、平成19年10月に設置されました。「道州制」とは、一言で申しますと、例えば大分県というエリアを廃止して、九州全体で一つの大きな地方自治体、例えば道とか州とかをつくって、単独の県ではできなかったような大きな政策を進められるようにしようというプランであります。この研究会では、このプランをたたき台として、大分という地域はどうあるべきなのかについて議論を重ねてまいりました。その中で、今年は限られたメンバーだけで議論するだけではなく、いろいろな方々、特に将来を担う若い方との意見交換会を開催しようということになったわけです。

本日はその第1回で、県内の大学・短大生にお集まりをいただきました。道州制という学生の中には少し遠いものと思われるかもしれませんが、今回は、学生の皆さんにも身近な少子高齢化をサブテーマとしてご議論いただくことにしました。

私も次世代を担う若い方の話を大変楽しみにしております。率直なご意見等をいただければありがたいと思っております。簡単ですが、ごあいさつとさせていただきます。

(事務局)

ありがとうございました。それでは意見交換会に移ります。これからの進行につきましては、高橋座長にお願いします。

(高橋座長)

それでは、委員と学生の皆さん、お互い初対面でございますので、自己紹介から始めたいと思います。まず委員の皆さんから自己紹介をお願いします。続いて、学生の皆さんにお願いします。その際は学部・学年・出身県・専攻をおっしゃっていただくようお願いいたします。

(石川委員)

今年4月から大分大学法人の監事をさせていただいております石川です。3月まで2年6ヶ月間APU立命館アジア太平洋大学で地方行政法と地方行政学を教えさせていただきました。どうぞよろしく申し上げます。

(梅林委員)

現在、大分県建設業協会の会長をしております梅林建設の梅林であります。道州制は私どもの業界は関係あるのですが、学生の皆さんとは余り馴染みがございません。看護科学大学などの工事では関係あるんですが、看護を受ける立場ですので、どれだけの話ができるか分かりません。今日ご列席の大学からは、当社や建設業界に入られていて、ありがたいと思っております。今日はよろしく申し上げます。

(辻野委員)

辻野と申します。大分に来て10年目であります。欧米人のように引退後は一番暮らしやすいところに行こうと思って、それはどこだ、大分だと言うことで16年前に大まじめに下調べに来ましたら、定年前に日本文理大学からお誘いがありまして、文理大に5年、別府大学に3年、今はフリーであります。着任して「大分学」というのを提唱しまして、その成果の一つが「日本再発見 第1巻大分県」です。大学生諸君は是非お読みいただきたいと思います。大分県が第1巻になるというのは、トリニータがナビスコカップを獲るよりも難しいんです。京都や奈良が一番になるのは当たり前でしょう。大分県が第1巻なんて言うのは誰が考えても無茶な話で、反対する東京の出版社の編集部で1時間説得をしました。

私の本業は政治学で、ブリタニカ日本版に世界の少数民族問題を書いております。

それから、以前、京都造形芸術大学にいまして、その前は京都精華大学、漫画学部のあるところにいました。私の友人は芸術家が多くて、本日は、県内唯一の芸術系大学に初めて来ましてワクワクしております。どうぞよろしく願いいたします。

(中山委員)

県立芸術文化短期大学の理事長兼学長をやっております、中山と申します。よろしく願いいたします。私は大学の教授を経由したのではなく、30数年間、民間の会社でエンジニアをやっております、何の因果か約2年前、本学に奉職したわけです。私はサラリーマン時代、北は青森県に転勤で参りまして、たまたま八戸市という太平洋側の昔の大名で言えば南部氏の地方に住んでいました。免許証の更新で警察に行ったら、安全教育をする警察官の言葉が全く分からない。南部の言葉はなまりはあるんですが、分かるのでお

かしいなと思っけていまして、後で聞いたら、あの警察官は津軽から来たんですよという訳です。更に話を聞いたら青森県警に奉職したら、津軽の人は南部に来て、南部の人は津軽に行くということらしいんですね。なぜかという仲が悪いっていう訳です。お互い仲が悪いところをみているっていう訳です。明治維新のときに津軽と南部は野辺地というところで戦争したんです。野辺地戦争というのは学校で習いましたが、100年経っても遺恨試合をやっているということですね。やっぱり地縁、血縁というものは非常に大切なもので、我々同じ日本民族といいながら、そんなに長い間、まだそんなことを言っているのかと、思った記憶があります。道州制の話におまえも一枚加われと言われましたときに、うーんと唸ってしまった訳です。九州も戦争したことがあるんですね。一方でそういう思いもあります、大分は50年ぶりに帰ってきたということもあって、皆さんと一緒に、学生とも一緒に将来を作り上げていく仕事に従事していることにやりがいを感じているところです。よろしくお願ひいたします。

(西委員)

こんにちは。ツーリズム大分の会長をしています西と申します。観光協会の会長であります。道州制というのは観光面でも大変重要なものでありますので、この会で勉強させていただきたいと存じます。本業は焼酎を作っている会社をやっています。いいちこをつくっております。皆さんにはいつもお世話になっております。これからもよろしくお願ひします。

(林委員)

林と申します。よろしくお願ひします。私は農業分野の代表ということで、大分県農業協同組合経営管理委員として参加させていただいております。非常勤ですが、農協の経営に参加しています。普段は国東半島の真ん中あたりで農林業を営んでおります。6年前にUターンをして帰ってまいりまして、山の中は非常に厳しいんですけど、それなりに新しいことが起こっております、そういうところも是非若い人には感じていただきたい。私もびっくりしたんですが、道州制については、例えば50年後ということではなく、10年とか15年先にはそういう方法が出るんじゃないかという考えで進んでると思いますんで、直接皆さんの将来に関係することではないかと思ひます。率直な議論をしていきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

(村上委員)

皆様こんにちは。村上和子と申します。社会福祉法人シンフォニーというところで福祉の仕事に携わっています。ですが、今日は実は私この席でよかったのかなと思ひています。何を隠そう私も社会人学生です。嘘じゃないと言うことで学生証を持っています。大分大学経済学研究科後期課程2年目です。入学式の時、修士課程の時もそうだったんですが、保護者の方はあちらですと言われてしまいました。やめることなく通っております。今日はどうぞよろしくお願ひします。

(K)

皆さん初めまして。私、立命館アジア太平洋大学4年生のKと申します。熊本県出身なんですけれども、約4年前に別府に移り住んでですね、ものすごく別府の土地柄だとか、別府で色んな活動をされている人に対してものすごく魅力を感じて、僕自身もNPOに所属しながら、大学生活と合わせて別府で暮らしております。卒業して別府を出るかどうかわからないんですけども、大分県、特に別府という土地は色んな資源がある町だなあと

思っています。色んな可能性を含んでいる土地だなあという印象があります。今日の少子高齢化についての会議でどんな意見が言えるか分からないんですけどもよろしく願います。

(J)

別府大学短期大学部保育科2年生のJです。出身は大分県大分市です。少子高齢化は、保育を学ぶ僕たちには直結する問題だと思うので、皆さんの力があって、子供が増える環境が何かつくれたならば、僕たち保育士もすごく頑張れると思いますので、今日はどうぞよろしく願います。

(I)

別府大学4年になります、文学部人間関係学科から来ましたIと言います。僕は長崎県の五島列島から別府に来て、もう4年目なのですが、大学2年と3年の時には全然学校に行っていなくて、サークルやバイトばかりしていました。4年目になって両親や学科の先生の協力もあって学校に行くようになりまして、すごく毎日が充実していて、高校生のようには学校に行っています。今回、こういういい勉強になる機会をいただいて、人間関係学科は主に福祉分野、介護福祉士や社会福祉士、精神保健福祉士などを養成する学科で、少子高齢化というテーマには福祉分野からアプローチできるのかなと思っています。

今日はたくさん勉強して帰りたいと思っています。よろしく願います。

(H)

日本文理大学から参りました経営経済学部3年生のHと申します。生まれも育ちも大分県、ずっと大分県にいます。大分県は緑がいっぱいで、生まれたところは緒方町という小さな村なんですけれども、少子化で小学校がどんどんなくなってしまって、この問題に直結していると思いますので、どんどん意見を出していきたいと思っています。よろしく願います。

(G)

皆さんこんにちは。日本文理大学経営経済学部3年生のGと申します。私も生まれも育ちも大分です。今日は、立命館アジア太平洋大学のKさんが適確な意見をバンバン言ってくれると思うので、それにちょこっと付け足すような感じで意見を言っていきたいと思します。よろしく願います。

(F)

大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科2年のFと申します。僕は生まれは三重県で、1年前から大分に来て社会学を中心に勉強しています。九州の皆さんとは違う視点でものが言えたらと思っています。よろしく願います。

(E)

同じく、大分県立芸術文化短期大学2年のEです。情報コミュニケーション学科に所属して、社会学を専攻しています。出身は熊本県です。地域社会学に興味がありまして、道州制や研究会にも大きく関わっていると思うので、色んなことを学びながら、自分なりの意見を持てたらいいなと思っています。よろしく願います。

(D)

大分県立看護科学大学4年のDと申します。看護学部看護学科です。将来は行政の保健師になろうと考えています。今回は少子高齢化についてということで、高齢化が進んでいる中で、高齢者の健康を守ることはもちろんですが、今、虐待の報道が多かったり、過疎地域で産婦人科医や小児科医が少なくなっていたり、医療機関が少ないだとか、色んな問題があると思いますので、地域の皆さんの健康を守っていく一つの職種に就く上で、この意見交換会に参加できたことは貴重な経験になると思っています。今日はよろしくお願ひします。

(C)

こんにちは。大分県立看護科学大学4年のCです。道州制について触れる機会がなかったので、皆さんの考えとかどういう人がどういう風に考えているだとか知って、医療の側面からアプローチできたらいいなと思っています。よろしくお願ひします。

(B)

こんにちは。大分大学経済学部3年のBです。生まれは東京ですが、20年間ずっと大分で暮らしているので、生粋の大分人だと思っています。専攻は地域システム学科で地域の産業構造や活性化について勉強しています。今回の少子高齢化は地域の活性化に大きな弊害になると思っています。問題の解決について今回学べたらいいなと思っています。よろしくお願ひします。

(A)

こんにちは。大分大学大学院教育学研究科社会科教育専攻に所属していますAと言います。ゼミは人文地理学に所属しています。昨年大学の卒業論文を書いたのですが、国東地方を研究地域として設定して、国東に立地する企業が地域に対してどのような貢献活動を行っているかということ調査しました。

その時に、地域に暮らしている人が、今回テーマである少子高齢化に大きく影響を受けていると感じました。企業の方が地域のために奉仕活動をしたり、小規模集落に行って公民館清掃をしたりだとかそういった活動を見てきて、少子高齢化や道州制は多少なり興味があったテーマなので今回参加できて、とても勉強になると思っています。よろしくお願ひします。

(高橋座長)

どうもありがとうございます。

それでは、次に本日の意見交換会の進め方について事務局から説明をお願いします。

(中垣内課長)

事務局の大分県行政企画課で課長をしております中垣内（なかがいと）と申します。出身は兵庫県神戸市でございます。進め方ですが、今日は15時半までの時間設定をしております。まず、今日の議論のベースとなる資料を説明いたします。資料は1週間前に届ける予定でしたが、3日前とか直前にしか届かなかったという方もいらっしゃいました。申し訳ございません。30分間の予定ですが、できるだけ意見交換会の時間を取りたいということもありますので、ポイントを絞って説明させていただきます。その後、意見交換ということで70分ほど時間を取っております。少子高齢化をたたき台としてということがありますが、行政企画課は少子高齢化を専門に扱っているところではなく、道州制だとか、国と地方の関係の中で地方はどうあるべきかを考えるところでもあります。皆さんにはサー

クルだとか、ボランティアだとか学業を通じて多彩なご意見があろうかと思しますので、活発な意見をいただければと思います。進め方については以上です。よろしくお願いいたします。

(高橋座長)

続きまして、意見交換に移りますが、その前に意見交換の材料として資料をお配りしておりますので、その説明を事務局から簡単をお願いします。

(中垣内課長)

引き続き、私から資料の説明をさせていただきます。

～資料説明～

(高橋座長)

はい、ご丁寧なご説明ありがとうございました。

学生の皆さんから、学校での自分の専攻や、個人的な体験などからご意見をいただきたいと思います。委員の皆さんのご意見もあろうかと思いますが、今日は学生さんからご意見を伺うということが主眼ですので、そのところをよろしくお願いいたします。

あと70分くらいあるので、学生さん一人当たり3分で発言をお願いしたい。委員さんは一人当たり1～2分をお願いします。

まずは、立命館アジア太平洋大学のKさんからお願いします。

(K)

ものすごく厚い資料だなあと思いながら見ていました。少子高齢化が、様々な問題につながるというか、何をしゃべっていいかよく分かりませんが。僕は地方地方にあった対策というか、取り決めというものは絶対的に必要だと感じています。都市を形成するものは色々あって、コミュニティだとか文化だとか資源だとか産業だとか商業というものは、その都市の歴史からみても、他と絶対違う強みがあるので、細部にわたって地方にあった地方の資源を有効に活用する取り組み、取り決めが必要だと思います。

株式会社ではなくNPOやNPO法人がたくさんできている中で、NPOの強みを生かし、行政の強みを生かしながら、よい関係を築くことが必要だなあと考えていて、今、具体的に思い浮かばないけれど、お互いwinwinになるような協働ができればいいのかなと思っています。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。第1回目はこれくらいにさせていただいて。次にJさん。

(J)

はい。僕は、保育所に絡めて話をしたいと思います。例えば国が乳児一人につき1.65㎡の乳児室の設定をするわけですね。保育所に実習に行ってみると、先生方は保育士の数が足りないと言うんですね。国が設定しているルールは、許容できる最低のルールだと思っているんですが、それでも先生方は少し厳しいと言っていたので、国のルールに全て従えとは言いませんが、地域で保育所の規定をつくってしまうと保育士の負担が増えたりだとか、女性の保育士が多い中、女性が仕事をする時間が増えてしまう。ということは、仕事に生きがいを感じる女性が増えている中で、子供を産むタイミングがなくなるとか、そういうことにつながるのではないかと考えています。

女性が仕事をする時代なので、休暇だとか、産めるような時間をつくってあげることが大事だと思います。26歳の姉がいるんですが、姉が子育ての休暇を取りたいと会社に言うともものすごく嫌な顔をされたと聞きました。育児休暇とかまだ浸透していない気がするので、大分県はその辺りを強化して欲しいと思います。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。では、別府大学のIさん。

(I)

福祉分野から地方主権とか地方分権を考えていて、今、介護職の求人の増加が言われていますが、僕らや更に下の若い世代に福祉分野の職はどうですかと聞いても、賃金が安いとか、夜勤が多いからきつそうとか言われています。国が給料を上げるようにするとかしてくれているけれど、それでも人材不足が懸念されているのではないかと考えています。これから道州制を取り入れたときに、どういう選択があるか考えてみたいです。

(高橋座長)

学生さん3人に意見を聞いたところで、それに関連して委員から話を聞きたいと思いますが、村上委員ご意見ありますか。

(村上委員)

女性の就労に絡めて、産み育てやすい環境づくりについて、若い方が発言されたことがうれしかったです。私たちは、よく国のサービス基準と自分たちのことを比べて、自分たちの方がよくないときは地方に任せてくれと言ったりとか、よその県で進んでいる所があると国がそこに一律に合わせて底上げして欲しいと思ったりとか、対比して考えてみると、地方に任せてと言いつつも難しいなと思ったりもしました。

(高橋座長)

ありがとうございました。それでは日本文理大学のHさん、いかがでしょうか。

(H)

少子高齢化というよりも私の実体験で、自己紹介でも言ったんですが、緒方町にも緑がたくさんで、病院もちゃんときれいに整備されていて、住みやすいんですけども若い人がいないというのが問題なんですよ。若い人がいないという問題の中で、一番気になるのが小学校、中学校、高校がないんですよ。小学校、中学校は竹田の方になってしまっていて、若い人が竹田に住むようになってしまっています。若い人は竹田、老人は緒方と別れてしまっていて、若い人と老人のコミュニティが成立しなくなっています。小学校の頃は老人の方も一緒に参加して仲良く遊んでいたんですが、地域の方とのコミュニケーションがなくなっているのが問題ではないのでしょうか。お母さん方にそういった機会を与えることが課題ではないかと思ったんですけども。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。地域のコミュニケーションが不足しているのは行政の責任ではないのかと。総務部長、コメントがありますか。

(佐藤総務部長)

地域のコミュニケーションの欠如を行政がサポートするという形。例えば人が集まるとか、そういう機会をつくるという形ではできることもあるかと思いますが、現在、その所に行政の施策があるかという、ないですね。

生涯学習施設をつくるとかというときにはあるかもしれませんが、コミュニケーションの欠如の部分で行政が何かやっているかという、そこはないんですが、確かにそういったところまで踏み込んでやり直さないといけない、そういう地域がもしかしたらあるのかもしれないと、今の話を聞いて思いました。

(高橋座長)

ありがとうございました。日本文理大学のGさんお願いします。

(G)

Hさんが言われていたコミュニケーションについて言うと、6月くらいですか、米作りのイベントが別府の方であって、田植えをしました。小さい子どもさんも一緒にやって、そういう田舎のいいところを知ってもらうことを国や県、市が行うと活性化につながると思いました。

少子化についてはやはり、国が子ども手当を実施しているんですが、不景気だと言うことで結婚などに関して若者もしにくくなっているのかなと思います。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではFさんお願いします。

(F)

街中にいるときは少子高齢化という実感はあまりないです。結構、高校生、中学生、小学生などよく見かけるし、バイト先にもよく来るので。ご老人の方も結構元気に歩いている感じがします。ただ、実家に帰ったときに2クラスあった小学校が1クラスになっていたりとか、この間竹田市に研修に行った際、受け入れてくれた宿泊先の人に「街中歩いても人がいないでしょう。」というのをまず言われて、「誰か、人を見た？」と聞かれて、「何人か見ましたが、あまり人が歩いている雰囲気はありませんでした。」と答えました。街中に人が集中しすぎて、地域に人がいなくなっている感じがします。その一方で地域の重要性ということに、また皆が気づき始めたのかなという気がします。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。引き続きEさんお願いします。

(E)

私は講義や活動などで色々な地域に出かけて行って、竹田や湯布院、佐賀関など色々な地域の現場で地域づくりを拝見させていただいています。やはり、過疎地域、少子高齢化が進んでいる地域ほど担い手不足という問題がありますが、その中でも、少ない人数、高齢化、少子化が進んでいても、コミュニティ、地域の結束力が強いところは、みんな元気で、地域づくりが盛んなところを見て、私もすごく驚きました。

よそ者馬鹿者若者と言われるように、外部の方を呼んで、客観的な視点を取り入れた地域づくりが行われているところもあるんですが、まずは地域のコミュニティというか、地域の住民の集まりを育てていくことが大事ではないかと感じました。以上です。



(高橋座長)

ありがとうございました。今のところで、委員の皆さんから、どなたかコメントをいただきたいと思いますが、どうですか。

(林委員)

では、私の方から。

私は、安岐の両子という、どん詰まりのところで、小学校も中学校も廃校になっているところに住んでいます。私の妻は東京から連れて帰ってきたんですけども、なかなかそういうところに住みたくはないと言います。コミュニティをどうするかということですが、コンパクトシティという考え方もあるんですね。どこかある所に人が集まって、例えば農業はそこから行くというような。妻もそのようなことをすごくいいなと言います。農業をするのであれば田舎にいなきゃいけないかという、そういうこともない。私はそこにいた方がいいと思うんですけど、そうじゃないという人もいます。色んな考え方でやって行くのがいいと思います。

それから、少子高齢化で子どもが産み育てにくいという環境は、保育園をつくれればいいのかというのではなく、先ほどの会社の話もあるし、病気になったときに預かってくれるような保育園もつくらなきゃならないとか、色んなことがある。そういうことをこういう場で議論したり、地方のコミュニティの中で議論できる場があるといいなあと思います。全国一律に規制をしていく、環境をつくっていくというのは中々難しいところがあるのかなあ、と。そういう意味で、若い方たちがどういう所があればいいのかをどんどん主張したら、それを行政の人たちが受け取って色んなことを施策に反映してくれるのではないかと思います。

(高橋座長)

貴重なご意見ありがとうございました。それでは、看護科学大学のDさんお願いします。

(D)

資料にあるナースプラクティショナー養成については、Cさんが説明してくれると思うので、私は違うことを言いたいと思います。

私は保健師になるために就職活動をしています。保健師というのは病気や障害を持った方だけではなく、普通に健康に地域で暮らしている方も対象として活動するので、少子高齢化というのも、すごく関わります。インターネットなどで調べていた中で、長野県が全国で一番高齢者の医療費が安いという過去のデータがありました。それに逆比例して、全国で一番長野県が65歳以上の高齢者の就労が多いというデータが出てました。若者の就職の問題もありますが、高齢者の方がいかに生きがいや頑張れる場があれば、病気になることもなく、元気に暮らしていけるとと思います。コミュニティをつくって、そのコミュニティで活躍できる機会があれば、高齢者の医療費も安くなるのかなと思います。

もう一つは、虐待が気になっています。虐待されている子どもを早く見つけて、子どもの命を守るということが大事なんですけど、今は虐待している親子を引き離す機能と相談する機能が児童相談所に集中していると思うんです。一回保護した子どもが、家に戻った時にまた虐待されて命を失うとか、そういうケースが増えてきているので、引き離したのはよいが、そこで親に対して支援はできているのか、というのがすごく気になっていて。母親一人で子育てをしている方も多数いますし、そういう方は父親の役割、母親の役割もあり、子どもを育てている中でもすごいストレスがたまると思います。自分がいつ虐待してもおかしくないという精神状態のお母さんの声をよくニュースでも聞くので、そういつ

たストレスがたまってお母さんへのケアもできれば、子育てのしやすい地域になるのではないかと思います。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではCさんお願いします。

(C)

地方と国のルールが色々あると思いますが、地方に任せてしまってもうまくいけばいいんですが、夕張や阿久根のように失敗してしまう可能性もあると思うので、身近なことと国で統一してやることを見極めて考えていかなければならない、と思いました。

医療問題は、地域によって様々だと思うので、国のルールにあわないからといって医療を受けられないことがないように、ルールにとらわれて医療を受けられないということがないように、そういうところは柔軟に対応していくことが大事ではないかと思います

ナースプラクティショナーについては、日本ではまだ5つくらいしか養成する学校がなく、九州では大分県立看護科学大学でやっているんですけども、アメリカではすごく早くから始まっていて、1960年代半ば頃から、医師不足を補うためにナースプラクティショナーの養成が始まっています。現在は、限られた医療行為ですが、そういうことができる看護師が16万人います。お隣の韓国でも2000年から始まって、アメリカと並ぶくらい活躍していて、オランダ、ヨーロッパも進んでいるんですけど、日本だけが足踏みしている状態です。うまくいっているアメリカや韓国など他の国を見習って、どういうところがうまくいけばルールにとらわれずにうまくいくかという所、いい所を盗んで、地域と協働できたらいいのではないかと思います。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではBさんお願いします。

(B)

この資料を見て、地域の施策には国の制約がかかっていることを知りまして、道州制によって地域のニーズにあった施策が取れるというのはよいことだと思いました。ですが、大分では人口の格差やインフラの格差などがあるということで、そのような中で地域が自由な施策を行うということは、少子高齢化を逆に促してしまうことになるのではないかなと思いました。というのは、資料の20ページにあります岩手県の事例で老人と乳児の医療費を無料化するという事は、それ以外の働く世代の人たちの税金の負担が大きくなり、それは逆にその地域の働く世代が他の地域に流出してしまう原因になるのではないかなと思いました。

話は変わるんですが、先ほどDさんが言われていた虐待の解決にはコミュニティが大切だなと思いました。昔に比べて地域での助け合い、共助の精神が薄れているような気がします。そうした中で母親へプレッシャーがかかってしまって、虐待が起こってしまうのかなと思いました。共助を形成するための政策を地方は行わなければならないのではないかなと思いました。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではAさんお願いします。

(A)

2～3分ということと、何をしゃべればよいか今一つよく分かりませんが、資料の10ページに「皆さんの気づいた少子高齢化は？」という欄があるので、これにのっかって話したいと思います。

私の一番感じる少子高齢化の影響というものは、資料9ページの地域社会への影響というところで小規模集落のことやもっと言うと限界集落ができてしまうということです。そういった集落では地域の活力が低下してしまっていることが問題であって、具体的にどういものがあるかは様々あると思いますが、地域の生産力の低下や地域住民の購買力の低下などがあげられて、そういう地域にはお店ができなくなったり、元あった店が潰れてしまったり、というような負の循環が起きてしまって、地域の社会的な機能が維持できないということが大きな問題になると考えています。

この問題の解決の根本には、地域に人がいないというのが大きな問題だと思います。なので、解決のためにはどうやって地域に人を呼び込むのか、若者だけではなくて、Iターン、Uターンという言葉もあるように、若者に限らず、定年前の方であったり定年後の方であったり、地域に人を呼び込むための方法、施策というものを各市町村であったり、県が考えていかなければならないということを感じました。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございます。今のDさん以下のところで、委員からコメントをいただきたいと思います。石川委員いかがでしょう。

(石川委員)

道州制の議論の前提として、データを示しながら申し上げます。市町村合併が活発化する前の平成11年3月末に3,232の市町村があったんですが、それが今年の3月には1,727とほぼ半減しています。後半皆さんに議論していただきたいのは、明治の大合併、昭和の大合併、平成の大合併と言われていますが、こういう市町村合併の進展を受けて、今度は都道府県の在り方が問われているということです。特に国と都道府県の在り方が問われているという視点を是非頭の中に入れておいていただきたいと思います。それが道州制の議論の本質ではないかと思っています。市町村合併の次は都道府県をどうするんだ、このままでいいのかというのが根底にあります。

それから、小中学校の数です。小学校、中学校というのは単なる教育施設ではありません。文化施設でもあるし、最後は地域の人々の心のよりどころなんです。大分県の行政では限界集落という言葉を使わずに小規模集落と呼んでいますが、地域から子どもたちの声が聞こえなくなると、やはり地域の活性化は非常に難しくなります。平成13、14年、私が県教育長をやっていた時代に501校あった小中学校が、今年は438校です。10年経っていないんですが実に63校減っています。71校あった高校が59校です。この現実を皆さんの議論の前提としていただきたいと思います。

さらにその前提として少子化高齢化があります。大分県では、子どもが昭和23年には4万3千人生まれているんですが、去年は1万人を切っています。平成2年から1万1千人台に突入しています。二度と1万1千人台に回復することなく、平成11年からは1万人台になっています。そして、平成17年及び昨年と9千人台になりました。背景として平成16年12月が日本全体として人口のピークといわれています。日本は長期の人口低落傾向に入っています。あと25年経てば年少人口が2600万人から1000万人になると推計されています。若い人たちに自分たちの問題として受け止めていただきたいと思います。

もう一方の高齢化の問題ですが、県の高齢化率は25%を超えています。この状況を踏

まえて議論していただきたいと思います。

(高橋座長)

ありがとうございました。もう一人委員にコメントをいただきたいと思います。中山委員お願いします。

(中山委員)

芸文短大では、最近、竹田市の長湯温泉の近くにある下竹田（しもたけた）小学校だった廃校をサテライトキャンパスにさせていただきました。竹田市と芸文短大の友好協力協定に基づく出来事でした。

前の竹田市長にお会いしたときに、その場所はわさだタウンだとか、人が集まる場所に20分くらいで行けるところだと言っていました。そこに勤める若い家族向けに、小学校をアパート改装して住んでもらうようにすれば、子どもたちも増えるんじゃないかという発想を持っていると伺いました。

新しい市長は、芸文短大の学生がずっと来るようなキャンパスにすれば、若い人が来て賑わいが戻るのではないかという発想でした。私はどちらの方も過疎の問題に真摯に取り組んでいると思ひまして、どちらがいいということは全く思いませんでした。私も学生と一緒に泊まったりもしました。この間は校庭で地元の方がキャンプファイアの準備をしてくれたり、バーベキューを一緒にしたりしましたが、賑わいが戻ってきたと心から喜んでもらいました。どれだけ地元にとってそこにある小学校、中学校が大切な存在であるか実感いたしました。学生は、そういったところで学習をし、自然の中で元気を取り戻すということでプラスになるし、地元もプラスになる。そういうことを一方ではこつこつやっていくことが大切ではないかなと。根本的に少子高齢化が避けられない趨勢であるならば、我々ができる取り組みっていうものは色々な形であるのではないかと感じています。

(高橋座長)

ありがとうございました。それでは2巡目に移りたいと思います。Kさん、だいぶ話す内容もできあがってきたのではないかと思います、3分くらいをお願いします。

(K)

少子高齢化という現象が、パッと食い止めることができない中で、中山委員が言われたように、今やれることをやっていくべきではないかと思います。ものすごく抽象的ですが、地域やコミュニティが元気なところに住んでいけば、みんな何かそこでしたいと思うし、住みたいと思うし、残りたいと思うし、楽しみがあれば子供が産みたいと思うし、結婚したいと思うかもしれない。地域が元気になってくればいいなあと思っています。元気が何かというと、大分県にいる若者の数がどれくらい分からないですが、外から来ている若者が本当にそこに残りたいと思う土地であって、卒業後も残って、そこで生活してっていうのが一つの策なのかなあ、と思うし、若者が住みたくなる元気な町にするっていうのが、すべきことではないかなと思う。具体的な案はないですが、本当に若者と高齢者と子どもたちがコミュニケーションを取って元気な地域をつくるべきではないかと思います。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではJさんお願いします。

(J)

コミュニティやコミュニケーション不足という話がありましたが、僕もNPO法人に入っただけで、だいたい会員が1000人位というところなんです。そこではお母さんたちが子育てについて話し合ったりする機会を劇やキャンプなどを通して、きっかけをつくっていく訳です。NPO自体の財政面、財源が苦しい、会員がいないと成り立っていかない状況があります。お母さんたちが自信を持てるか、若者が今から子育てをしていくことで教えてもらうことがいっぱいある場所がNPOであったり、地域でなにかやっていることだったり、田舎では特産品を使った催しとかいろんな方法があると思う。そういうところに行政が補助をしてくれたらいいなと思う。そういうことが少子化を改善するような気がします。そういった地域づくり、県づくりをしていくことが大事かなと思います。

(高橋座長)

ありがとうございました。それでは、Iさんお願いします。

(I)

少子化のことが言われてきましたけれども、高齢化も大事だと思っています。

石川委員が言ったんですが、高齢者が25%を超えているということで、今朝のニュースでも大分市でも120歳以上の行方不明高齢者が140人位いるということでした。すごく驚きました。なぜそんなことが起こるかということ、地域のつながりが薄れているからではないかと思っています。少子化も高齢化も進んでいるので、その二つをどうにか結びつけられないかと思っています。子どもと高齢者、障害者、認知症の高齢者の方とかが共生できるような介護施設をつくってみたいと思っています。託児所や学童保育というのがありますが、そういうのを一つにすることによって、幅広い世代や障害者、高齢者、子どもが触れ合うことによって、認知症の方が子どもの言うことだったら聞くというようなことがあるんですよ。子どもと触れ合うことは、いいことだと思うんですよ。

その他、高齢者や中高年の方とかがママサロンみたいなものをつくって、子育てのプロの方々なので、育児の不安とかを打ち明けたり、用事のあるときは子どもを預けたりするような簡単な施設をつくったらいいんじゃないかと思っています。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではこのところで委員からコメントをいただきたいと思います。辻野委員からお願いします。

(辻野委員)

今、大変おもしろい提案を聞かせていただきました。ちょっと事務局にクレームをつけようと思ったのは、今日のテーマ少子高齢化と道州制がどう結びつくのか、少子高齢化の問題があって、国が画一的な決まりをつくるのは困るので、じゃあ県に任せてもらったら片付く問題なのか。なぜ道州制なのか全然説明がないので、今のような新しい施設をつくるときに、国では駄目だ、それを県の権限にしたらスッと解決するのではないのか。なぜ道州制なのかという説明がないので、皆さんさっぱり分からないでしょう。道州制と絡めた発言ゼロでしょう。なぜ道州制なのかを、途中でいいから言っていただきたい。国と県だけでは困るのでもう一つ道州制を入れなきゃいかんという必然性がよく分からない。正直な話です。

(高橋座長)

中垣内課長から、そこの所の補足説明をお願いします。

(中垣内課長)

資料のつくりと道州制研究会という名前と説明不足のところが多々あったと思います。今回資料づくりに当たって念頭に置いていたのは、道州制というのは、地方分権という大きな流れがあって、それを達成しようとする一つの手段ですということが前提にあって、その前に地方分権だとか地方主権という言葉は我々行政の人間などは知っていると思いませんけれども、一般の方には浸透していないのではないかと認識がありました。私も大学時代そうだったという所がありまして、道州制の前提となる地域主権というものがなぜ必要なのか、あるいは、地域主権を実現するところというリスクがあるんじゃないかということを知って分かっていただきたかった。また、国と地方という前にNPOだとかボランティアだとか、そういった観点でご議論いただくのがよいのでは、と思ったわけです。辻野委員にご指摘いただいたように少子高齢化と道州制と結びつけるという観点は、実はあまりなかったというのが実状です。その点についてご説明不足だったことは申し訳なかったと思っています。

(高橋座長)

ありがとうございました。引き続き、今の説明を前提としてHさんをお願いします。

(H)

いきなり道州制を絡めてということになりましたので・・・。

(辻野委員)

絡めなくていいですよ。

(H)

いいですか。

一番気になったのが、コミュニティと働く場というキーワードがよく出てきたんですが、やっぱり若者は働くところに住むということだと思うんですね。若者が集まる、働く場とコミュニティを絡めると、私のアイデアですが、老人ホームと保育所を一緒にしてしまうという考えもあるかなと思いました。それだと地方だと十分な土地もあるし、病院のような広い場だったら、制約もクリアできるんじゃないかなと思いました。難しいとは思いますがアイデアを出せば、なんとか乗り切れるのではないかなと思いました。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。老人施設と子どもの施設を一緒にするという発想は、多分、国も県も市も、どっこもないんじゃないかと。ひとつ検討してはどうですか。それでは続いてGさんをお願いします。

(G)

結構言うことがなくなってきたんですけど、地域で施設をつくろうという意見が多々あったんですけど、国のルールだとできないことを地方ならできるようにする、新しいことをしたいのであれば道州制を取り入れることもよいのではないかなと思いました。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではFさんお願いします。

(F)

道州制の話が出ているので、乗っかきたいんですが、中山学長が最初におっしゃっていた青森県内でもいがみ合っているという話がありました。それは元々地域のアイデンティティがあることだと思うんです。僕の出身である三重県は、そもそもどこに含まれるんだということがあります。テレビの天気予報によっては中部と言われたり、近畿と言われたり、東海とも言われてますし、こっちに来てからは近畿の人だよねって言われました。若い人も持っていると思うんですけど、地域のアイデンティティを持っている人、特に高齢者の方は強いと思います。道州制になって色んな施策ができるのはよいと思いますが、一方で地域のアイデンティティが混濁してしまって、私は何々県の間人だっという風に若い人に説明をしても、それが理解されない。ちょっと悲しいというようなことになるのでは、と思います。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではEさんお願いします。

(E)

大学の講義でも道州制と言う言葉がよく出てくるんですが、広域行政にすることによって大きなことができる。都道府県の財政の問題もありますし、大分県だけでは財政的にできないことがたくさんあると思うんです。そういう中で道州制ということがあって、九州という広域行政にすることによって助け合うということではできると思うんですが、地方分権、平成の大合併というのが前提にあると思うんです。道州制によってメリットもあると思うんですが、デメリットも多くあります。住民サービスの低下だとか行政の中心をどこの地区に持って行くのかという問題もたくさんあって、サービスの低下によって高齢者の病院が近くにないとか、妊婦さんを診察できる病院がないとか、あると思うんですよ。道州制という大きなまとまりとなったら、大きな問題もたくさん出てくると思うので、地方分権、平成の大合併によって、何がよくなって何が悪かったのかというの、道州制の前に、見直す必要があるなと思っています。

(高橋座長)

ありがとうございました。ここまでのところで委員のコメントをいただきたいと思いません。梅林委員お願いします。

(梅林委員)

今日は直接話を聞いて、学生の皆さんが大変よく考えているんだなど、大変うれしく感じました。

Eさんが言われたように、道州制になったら住民サービスはどうなるんだとか、本当に何もかも大きくなればいいんじゃないかと、また、都道府県がなくなった場合に住民サービスが向上するのか低下するのか。

それから、Cさんが言われたように、国と地方の役割、何もかも地方に持ってくればいいのか、良い面と悪い面とあるのではないかと、皆さんよく勉強して考えているなど思った次第です。

特にAさんが言った、地域にどう若者を呼び込むかと、この言葉に尽きると思うんです。道州制にするのか、今のままでいいのか、国と地方の役割をどうするのかというの、

地域をいかに住みよく、地域をどう活性化していくかということなんですよ。そのためにどういう手段がいいのかということで、こういう意見交換会をしているわけです。

若い人がいれば少子化が防げるし、若い人がいるためには、若い人が卒業して何も仕事をしなくて食べていけるわけではないですから、雇用の場がなくてはならない。雇用の場をどうするかというと企業誘致をしないとイケない面もある。ちなみに広瀬知事が就任して7年の間に150もの企業を大分県に誘致しています。地域の雇用が増えて、皆さんが一流企業にも入る。また、そういった企業も大分に本社を置いていますから、事業税も入ってきて、そのために大分県も潤っています。雇用の場を確保できたら、次は産み育てやすい環境ということで、若い人が結婚して、お互い働いていても子供を産みやすい環境、先ほどJさんが言っていたように、育児休暇だとか、男性も奥さんと一緒に子どもを育てるといった制度も整備しなくてはイケないんです。そういうものは追々いろんな面で整備していくわけですが、道州制になったときに住民サービスが低下しないように、それから先ほどBさんが言われたように、インフラという言葉が出ました。人口格差とかインフラ格差とか実際にあるんで、医療問題一つをとっても、大分県の場合は速やかに救急救命センターに行けるようにインフラを整備しないと住みよい環境にならないんですね。ですから、資料にも載っていますが、道州制にする前提条件というのは、インフラを整備してその上で、知事が言われている子育て日本一の大分県にするんだと、そうするためにどうするかということで皆さん苦労しているわけですから、皆さんからいい意見をいただいたので、道州制に持って行く前提条件として、やはりインフラの整備だとか、州都がどこになるのか、基礎自治体の研究が遅れているんですが、州都、基礎自治体の関係が、どのようになるのかも重要ですね。また、皆さん方が第一線で働くときに、住民税があんまり上がっても困りますので、働きやすい環境はどうあるかということで、若い方の知恵を出してがんばっていただきたい。それから若い方の出会いの場ですかね、これが本当にありそうで少ないのではないかと思います。若い男女が出会える場を多くつくってそこで出会って、素晴らしい家庭を作って行こうということになれば、また、高齢者の方々も年を取っても働ける人は働いて、税の負担をするという風にして行くべきではないかと思っています。皆さん方の真摯な意見を承りましてありがとうございます。

(高橋座長)

ありがとうございます。引き続きましてDさんからお願いします。

(D)

過疎地域では高齢化が中心部よりすごく進んでいます。以前、佐伯市に実習に行きましたが、佐伯市の高齢化はひどくて、特に周辺部では30%を超える地域が普通にあるんです。そういう所は医療機関も少なく、独り暮らしの高齢者も多くて、筋力が低下して外に出たくないとか、外に出る機会がないとか、そういう方が多くいました。今、大きな医療機関で診療を受けるために3時間待って3分の診療とか、すごく待ち時間が長いことが問題になっていますけれども、私の大学で教育が進んでいるナースプラクティショナーが日本でも活躍できるようになれば簡単な初期診断ができるようになるので、高齢者の方がわざわざ本数の少ないバスに乗って、医療機関を受診しなくても解決できるようになるのではと思います。

資料にある道州制導入のメリットとして、高度な医療体制の充実や大規模震災等の対応が都道府県を越えてできるのではないかと言うことはその通りだと思ったのですが、その時に問題になるのは、独り暮らしの高齢者や妊婦の方とか、最初に救助しなければならない方を都道府県を越えてネットワークをつくる時にどう把握していくか、どの方を最初



に救助すればよいかの住民の把握が結構難しくなるのではないかと思います。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございました。それではCさんお願いします。

(C)

道州制を取り入れることでのメリットがたくさんあることを学びましたが、統合するとその分隔々までサービスが行きにくくなってしまわないかということが率直な意見です。今でさえ野津原の今市とか、吉野の方とか高齢化率が40%を超えていまして、そういうところに、サービスが行き届かなくなったらどうなるのかという懸念があります。どうしたらそこで子育てがしやすくなったり、子供が増えたりするのだろうかというのを皆さんで考えて行かなくてはならないし、私たちも結婚して子供を産むときに、どういうことがあれば安心して産み育てることができるのか、自分のこととして考えていかなければ、困るのは私たちです。

今日みたいに大分の学生と話し合える機会があまりなかったもので、こういう機会を増やしてどういうことをすれば住みやすくなるかとか、他の大学でどんなことをしているのか、県立芸術文化短期大学の方たちの取り組みも今日初めて知りましたし、そういうのを皆さんが知る機会があればと思いました。

(高橋座長)

Bさんの前に西委員にコメントをいただきたいと思います。

(西委員)

平成の大合併の時に、地域住民にアレルギーがありまして、それを説得するのに環境問題があったと思うんです。ゴミの焼却場は大規模化が必要だということで、妙に納得して合併したんですけども、今そのアレルギーがまだ残っていらして、合併したのはまずかったなあというのが地域住民の声です。私は宇佐に住んでいるんですけども、安心院とか院内とかの地域文化がどんどん切り捨てられてしまうというような状況がありまして、道州制を持ち出したときに、皆さんがどんな反応を示すのかなあと思っています。本日は学生の皆さんが道州制の導入についてどのように考えられているのかが分かりまして勉強になりました。

ただ、観光面で考えてみますと、中国やモンゴルの方に行ってみますと、北海道ブランドが非常にいいんですね。九州という言葉は、ほとんど聞かれないんです。北海道は、行ってみたい行ってみたいと、外国でも浸透しているんですけど、九州ブランドはほとんどないですね。そういう意味合いでは、東南アジアなどにも九州ブランドをもっともっと広めて行くためには、広域的な行政というものが必要かなあと思っているんですけども、何はともあれ道州制の導入については、この間の市町村合併の時の環境問題とゴミの焼却問題といった説得力のある動機が薄いかなあと考えています。以上です。

(高橋座長)

それではBさんお願いします。

(B)

少子高齢化の問題について重点を置いた話が多いのですが、私はどういう形で道州制を導入すれば、人々が住みやすくなるかということを中心に調べていたので、問題点について

て重なっていたらすいません。

やはり大分は交通面が他の県に比べて、余り発達していないというのを思いまして、交通弱者、車を運転できない高齢者の移動手段がなくて住みにくくなっていると思いました。そういう問題を解決するには、大分の公共交通機関、バス、電車などをもっと活性化しなければいけないのかなと思ひまして、それを活性化させるためにも道州制というものを導入して、もっと県外との交流、県外の交通機関の行き来を盛んにすることで、大分の中での交通機関をもっと発達させる必要があるのではないかと思ひました。そのためには、大分県だけで抱えるのは難しいので、道州制を導入して、様々な県と協力していくことが必要ではないかと思ひました。

(高橋座長)

ありがとうございます。Aさんお願いします。

(A)

私は教育福祉学部教育養成課程の卒業生で、現在教員志望なのですが、先ほど委員が言われていた学校は地域のために役立っているという視点は、普段考えていなかったのが新鮮に思えました。今までは、学校は当然子どものためにあるもので、学校の活動は子どもをどう育てるのかということを考えて行われていたと思ひていましたが、学校の中でも運動会に地域の方を呼んだりだとか、文化祭であれば学校を開放して地域の方を呼んだりだとか、地域の交流というものが行われてきているのですが、それを僕は子どもが社会性を育むためとか、そういう視点でしかとらえていなかったんですけど、先ほど、地域の方にもいい影響があると言うことを聞いて、自分の中にも新たな視点というものが得られたので貴重な話だと思ひました。

学校数が減っていることは、だいぶ前から言われていましたが、学校が地域からなくなってしまうと、地域で育つ子どもがいなくなって、郷土愛だとかそういうものが育まれなくなって、地域に戻ってきたいと思う子どもがいなくなってしまふのではないかと思うので、学校数の減少は少子化に大きな影響があるのではないかと思ひます。

道州制が取り入れられたときに、学校がどういう立場になるのかということに疑問に思っています。県がなくなって州になったとき、州の中の市町村にある学校にどんな影響が出てくるのか、僕の中ではまだ理解できていないので意見することはできないのですが、教育という面だけで見ると道州制というものにどういう意義があるのかなというのが課題です。以上です。

(高橋座長)

学生さんには2巡目のご意見を伺ひまして、委員の皆さんにもご意見を伺ひました。私からもコメントをしたいと思ひます。

私は道州制が本当にいいのかどうかというと、今のところ絶対にいいとは言わないけれども、道州制を入れないと日本は持つのかなあと、国は持つのかなあと考えております。道州制というものは、要するに県を取っ払って広域にしようというものですが、その本質は何かというと、地方自治とか地方主権になるんですね。地方に誰がいるかということ我々がいるんですね。だから、私は個人の自立とか自治とかいうものがなかったら、うまくいかないんじゃないかと、基本的に思っています。

それから、もう一つ、少子高齢化の問題を解決するには、非常に難しいんですけども、少子化を解決しなくちゃならない。生まれたら死ぬに決まっています、長生きすれば高齢化しちゃうんですね。少子化を解決するとなると、移民とかは別にしますと、子どもの数を

増やさなくちゃならない。そういうことを意識をして欲しいと思います。私からは以上です。

残り時間があと15分くらいになりましたので、これからは何巡目ではなくてそれぞれがコメント、ご意見をいただきたいと思います。委員からお願いします。辻野先生、先ほどは質問だけで意見をおっしゃらなかったもので、どうぞ。

(辻野委員)

中央集権はいかんという議論はありますが、中央集権もいい所があるのではないかと。例えば、お医者さんの問題。大分県では産科のない所がある。例えば竹田市なんか。雇用の場はあっても、産科がなかったら移りたいと思いますか。病院が多いのは別府ですね。病院の隣に病院があって、病院だらけ。こういうのは統制があっていいのではないかと。それからお医者さんも自由意思で勤務地を選べるようになってはいますが、例えばこの間ロシアの大使館員にあつたんですけど、ロシアでは大学で東洋の言語を学ぶのは自由意思ゼロです。成績順でおまえは何語、成績が悪いと聞いたことない言語しか学べない。そういうところもあるんですよ。全部そうであってはいかんと思いますが、例えば10年間は君は豊後大野市で勤務しろ、10年間経過したら自由意思で勤務地を選べるといった統制というか計画がなければ医療が成り立たないのではないかと、研修先を選べるようになってはいますが、さしあたり元に戻せよと私は言いたい。だから何もかも地方分権ではなくて、中央集権のいいところを取り入れたらどうか。学校だって、入学生一人とか卒業生一人とか日本ではニュースになるでしょう。あんなニュースは外国ではないんです。完全な地方自治だったら、財政がなくなったら小学校なんかないんです。オーストラリアだったら通信による学校しかないとか、通学の小学校はないんですよ。中央集権だったら子どもがいたら学校をこれだけつくらないといけなとか、中央集権に救われている面もあるわけです。省ごとの縦割りで悪い面もあるけど、中央集権イコール悪と思わないでもいいのではないかと。医療だとかの面では、よい面、改善する余地があるのではないかと思います。

(高橋座長)

学生の皆さんからどうぞ。はい、Kさん。

(K)

質問ですが、今日のこの会はどういう方向に向かっていて、どこに着地点があるのかわかりません。医療の面から話したり、地域コミュニティの面から話したり、本当にばらばらで今日の会議をまとめるとしたら、どういうまとめ方になって、何につながっていくのかなあ、て言うのがあまり見えなかったのでお伺いしたいんですけど。

(高橋座長)

大分県道州制研究会は、県で設置した研究会ですが、こんな研究会は他県にはありません。非常に進んだ取組であると、我々も自負しています。研究会としても、こういう意見交換会は初めて行う訳です。Kさんの率直な意見について、県の佐藤総務部長からお答えをお願いします。

(佐藤総務部長)

最初にこの意見交換会を企画したときに、我々が学生の皆さんを過小評価していたというのが感想です。今日は大きな構えで、色んなとっかかりをつくって、皆さんに発言していただくように考えた結果、道州制研究会なのに何を議論するのかということになって

しまったことは、事務局の反省として率直に申し上げたいと思います。

Kさんのご質問に答えるとすると、今日いただいたご意見には道州制を考える上で留意すべきポイントというのがちりばめられています。最終的に親の研究会である道州制研究会でどう整理するかは、高橋座長に任せていただきたいと思います。今日は学生の皆さんが考えている中に道州制を考えるときのヒントになるものがどういう風に出てくるのか、それを我々が誘導するのではなく、テーマを提供したときにどういう方向が出てくるのか、ある種実験的に意見を聞かせていただいたので、実はこの会を最初からまとめようというつもりはありませんでした。色んな素材が出てきて、結局なんなんだというKさんの感想はその通りかもしれませんが、事務局としてメモを取っている中で色んないいなと思う意見がたくさん出ましたので、今日の会は我々としては非常に有意義だと思っています。ただ、設計の仕方が皆さんにわかりにくかったことはお詫びしたいなと思います。以上です。

(高橋座長)

ありがとうございます。その他学生の皆さんからご意見、ご質問ございませんか。

ないようですので、委員から学生の皆さんに、質問・意見を言って欲しいと思います。村上委員をお願いします。

(村上委員)

一つ情報提供ですが、先ほど出てきました高齢者と児童と一緒に過ごせる施設があるといいなあと言うことでしたが、実は富山県では小さいデイサービスセンターなんです、高齢者、障害者それから児童と一緒に日中過ごせるような施設がいっぱいできています。これを富山型デイサービスとかいって、真似している県もあります。先ほどご提案いただいたように、国の法律では高齢者のサービス、障害者のサービス、児童のサービスが縦割りで別々になっているので、ある県では高齢者と障害者の施設が中では一緒になっているのですが、縦割りなので、入口を別々につくらなくてはならないとまずいよねと、わざわざしているとかもったいない面もあります。

それから、大分県は合計特殊出生率が全国7位で、実は高い位置にあるんですね。これは大分県にすごく保育所が多いとか、お母さんに特別高い手当が払われていることではありません。私は福祉の部会などに出席する機会が多いんですけど、そこで話したときには、もしかして大分では、消えかかったとはいえ、コミュニティとか、そこのおじいちゃんおばあちゃん、近所のおじちゃんおばちゃんたちの力がまだまだ残っていて、子育てをしている若い人たちを支える何かが残っているのではないかと、あるんだろうなど。

もちろん保育所とか相談所とかもっとつくって行かなくてはならないし、そういうところには国から補助があると思うんです。でもそうじゃなくて法律にないような子育て、大分ならではのものをつくらうとしたときは、国から補助金がおりてこない。そうしたときに九州でコミュニティが残っているところに財源を持って行って、九州ならではとか、南九州ならではとかそういうサービスをつくりたいといったときに、国とは違う、国にはないから道州制で九州は一つと言うことで自分たちで財源を確保して、自分たちの暮らしやすいまちをつくっていかうというような考え方が、一つの形ではないかと思っています。

今日の会では考えやすいテーマとして、少子高齢化を取り上げたのかなと思っています。とにかく私が言いたいのは、学生の皆さんは自分の大学の宣伝をしていただいて、後に続く学生が大分県にやってくるように、していただきたい。あとは行政の皆さんががんばって、大分に残って働き続けられる、暮らし続けられるように、していただければ少子高齢化も心配しなくてよいのかな、と思います。学生の皆さん、がんばってください

(高橋座長)

ありがとうございました。今日のこの会場は大分県立芸術文化短期大学にお借りしています。学長も委員としてご出席いただいております、最後に中山委員にコメントをお願いしたいと思います。

(中山委員)

色々お話ししたいことはあるんですが、私がここの学長になって欲しいと言われたときの殺し文句がですね、「大分県に優秀な子女を残してください。」と、そういう教育をやってもらいたいんだということだったんです。東京でもずっと仕事をやっていましたんで、東京でやっている風を大分でも吹かせてくださいと、そう言われました。それが殺し文句になって仕事を始めさせていただきました。今は来てとてもよかったと思っています。本当に優秀な子女を大分県内で、女性が9割おりますので、よい結婚をして、よい子どもたちを育ててもらいたいという気持ちが非常に大きなものを占めております。

一方で、東京の風を吹かすという言い方をすれば、語弊がある言い方かもしれませんが、大分に帰ってきて思うのは、縮図だよということですね。日本の縮図。もしかしたら世界の縮図が日本かもしれませんけれども。日本の縮図がまた大分でもあるという風に思います。大分市が県の人口の40%を占めている。私は田舎が好きなもんですから、休みの度ごとにレンタカーで色んな所を回っているんですが、過疎はすごいものがある。それも大分県の中の縮図である、ということを感じます。道州制を考えるときに、国と県の関係、県の中の市と町村の関係というものが、全く相似形で出てきている、ということを知っておく必要があると思います。フラクタル模様というのを皆さんご存じかと思いますけれども、ミクロで見たときに非常に複雑な形状をしているものが、ものすごい数集まって大きな形になったときに、同じ形を取るんだという理論なんです。そのフラクタル模様というものを考えたときにまさに、この大分の中の一市町村と過疎の村との関係というのは、日本の中でも同じものがあると。その中間に道州制というものをつくるのも、どういう位置づけをするというのはとても重要な判断だと思います。

広域でやった方がいいもの、ミクロでやった方がいいものが混在していると思うんです。それを峻別していくということがない限り、一概に道州制という具合にバサッとやってしまうのは非常に危険性があると思います。そういう意味では今日の議論というのは、まさにミニマムな我々のまわりで起こっている人口の変化というようなことから出発して議論を起こしていったことは、私はとてもよかったと思っています。直接道州制に関係ないようなことも実はこういうことの議論がきっちりできた結果として道州制というものを考えるという意義があったと思います。

(高橋座長)

ありがとうございました。まだまだ若い皆さん方からのご意見をいただきたいところですが、予定した時間がまいりましたので、ここで本日の意見交換を終わります。本日いただいた貴重なご意見は、当研究会の報告書としてまとめ、研究会に提出する予定であります。

また、今日、実はもうちょっと言いたかった、家に帰って考えるとまだこういうことを言うべきであると、いう風にお考えの方は、メールや手紙で結構ですが、遠慮なく事務局までご連絡をいただきたいと思います。

今後、順次、意見交換会を県下で実施していきますので、委員の皆様にはお忙しいところですが、ご出席方よろしく願いいたします。

議事については以上ですが、その他事務局から何かございますか。ないようでしたら、

本日の研究会は、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

\*発言内容については、単純ミスと思われる字句、重複した言葉づかい等を整理の上、作成しています。